

学習指導法並に教材研究

詩による鑑賞指導(上)

—— 中学生を対象として ——

畑 実・鈴木洋一郎・佐藤クニ子・酒井為久

【はじめに】

イ 研究題目の設定とそこに至る経過

昨年度まで三年間、われわれは読解指導の研究を行ってきた。誤答類型の分析とその指導法を中心に、おもに中学低学年を対象にした研究で、その結果は本校の研究紀要に発表してきた。(1)読解は国語科の中心的な指導項目であり、今後も大いに研究を重ね教室の場を通して発展させて行かねばならない問題が多いが、教科部門の共同研究としては、一応終止符を打つことにし個人研究に俟つことを決めた。

本年度からは鑑賞(2)指導を研究目標にして、教育学部関係教官の御指導のもとに、国語科の4名の教官の共同研究とすることになった。本年はその第一年目に当る準備の段階にあり、討論・考え方の調整・予備調査の為に時間が費やされた。すでに、読解指導の共同研究の過程に於て、読解指導が書かれていることの正しい把握を目指すものである以上、その表現内容に生徒が如何に触れるかについては常に注意をはらいつつあったのである。さらに、昨年度の本校の総合部門の共同研究は「読書指導の研究」と「生活指導の研究」であり、研究テーマの分化はあるものの、それにたずさわったわれわれが読書指導の面での鑑賞指導の重要性と、中学生の場合の鑑賞は生活と結びついている側面が多い点とに留意させられたのであった。

このようなところから、本年度以後約3年間の予定で鑑賞指導の研究を始めようということになったのである。それは、読解ほどに一般的な関心は持たれていないが、読解と切りはなされた問題ではなく、読解を基礎にしその指導過程の一環として展開してきたものと考えられるのである。

ロ 詩を教材にし・対象は中学生

数次の話し合いの中から、鑑賞指導の目的は文学作品を読むこと、即ち、文学による教育であるということになった。そして、そういう意味の鑑賞指導の材料

としては、詩がよいだろうということになった。教材を特に詩と限定した理由は、第一に、われわれの研究が類型化と一般化を目指していること。その為には、比較的多くの事例が得られその処理が容易であることが必要となってくる。その場合に詩は小説・随筆等より適切な教材となってくる。第二に、教室を主体にした指導と研究の実施が考えられるから、多くの生徒に同じ作品を同時に鑑賞させる方が好都合である。詩はそれらの条件をよく満たすといえる。第三に、詩よりも表現形式の簡素な短歌や俳句は、表現内容に触れるまでの障害が詩よりも大きいのであり、生徒の自主的な鑑賞作業を求めることが困難になると考えられたからである。

次に、対象を本校の中学生に限定した理由は、高校生より中学生の方が反応が素直で信頼出来るからである。それに、単純な内容の詩を教材に出来るので、その詩に対する鑑賞がいかになされたかを推察しやすくその鑑賞についての指導研究が容易であろうと予想されたからである。そして、その結果をより高次の詩の鑑賞指導に応用してゆく方向を考えている。

注1. 本校紀要第三集

「国語学習における誤答類型の分析とその指導—
— 中学1年における読解を中心として—」

本校紀要第四集

「国語学習における誤答類型の分析に基づく指導
法— 中学1年における読解を中心として—」

注2. 「鑑賞」とは何かについて、直接御指導いただく教育学部上甲幹一助教授のお考えの要点を引用させていただく。

まず、鑑賞とは何かについて次のような規定をされている。

1. 具体的な活動である。
2. 受容活動である。
3. 美的対象にはまりこむことである。
4. 快感をともなう活動である。
5. 美的対象に価値判断をする。
6. 自己の体験がもとになっている。

7. 鑑賞の結果、よろこびや満足のおこすべきものである。

そして、鑑賞には個人差がかなり大きいけれど、共通性が種々見出されるのである。

以上の如くに規定され、次に鑑賞の過程として次の三段階が考えられるとされている。

1. 作品の知的理解を基礎として
2. その美的価値を認めようとする働きを通して
3. 情緒的満足を感じるのである

文学作品の場合、1の段階を経過しなくてはならない特殊性が存在する。

以上である。

Ⅱ 研究方法

さて、教材を詩にとり、対象を本校の中学生にしようという話し合いがなされた。そこで、どうい詩が中学生の発達段階に適應するかという問題が生じてくる。このことを調査するために、われわれは中学校教科書に見られる詩の調査をすることから始めた。その結果は後で述べるが、それとは別に中学生男女の詩に対する好みの調査・読詩歴調査も予備調査として欠くことが出来ないように思われる。(3)又、本校中学生の一般的な傾向や個々の特質を知るのに、本校指導の実施した諸テストの利用も考えなくてはなるまい。

その上で、われわれは中学各学年に適切と思われる詩を与え、自由に感想文を書かせる。提出された感想文を国語科の教官が読んで、すぐれているものや変っているものや劣っているものを抽出し、そのような感想文を書いた原因を追求することにより、そこから鑑賞指導上の諸問題をみちびき出そうとするのである。いわば、善悪両様の異常感想文に注目し、詩の鑑賞上の問題児を抽出して、その原因を探るところから鑑賞指導の研究を行なっていくとするのである。

だから、われわれは詩の鑑賞の仕方をいかに生徒に伝達するかを第一に研究しようとするのではない。詩の鑑賞の仕方を徹底させるにはどうしたらよいかというような教師の側に重点のある種々な問題への考慮も重要と考えるが、この共同研究では副次的な問題になってくると思われる。

注3. 中学生をよりよく知る為に、心理学の分野の成果の利用も考えている。たとえば、太脇義一著『感情の心理学』、培風館がそれである。

その第四章『情緒と情操』の中から、好みに個人差があることについての実験の結果を引用すると、

(1) 好みの標準については観察者の個人差が意外に少ないことである。ただ異なるのはその根拠の言語的な表現についてであることが多い。

(2) 対象の種別による選択根拠の違いも見出される。自然的、文化的および人間的対象に応じていくらか異なるものがあり、また飲食物については感覚的根拠が優勢である。しかしながら全体として見れば、対象の種別による選択根拠の差もまた予想されるよりもはるかに僅少である。

(3) 好みの根拠についての男女間の性差もとくに取り立てていべきものが見当たらないほど僅少である。ただ女性は選択決定時間が男性に比しておおむね、はなはだ小であることが特徴的である。この事実は彼女らが男性よりもはるかに感情的であることを証するものであろう。ところが選択の理由にいたってはほとんど男性と大なる差異が発見されないのである。

等、鑑賞指導の方向を考えて行く上でも参考になることが多い。

Ⅲ 中学校教科書に見られる詩

前述したように、教材として使う詩を選定する為に中学校国語教科書に見られる詩を調査し、内容の傾向にしたがって整理して見た。

第1表

(4)

教科書の種別	内容の傾向	明るい詩	静かな詩	力強い詩	思索的な詩	愛われた詩	感覚的な詩	計
A		1	7	4	0	3	1	16
B		6	2	2	3	0	0	13
C		8	5	2	1	2	2	20
D		5	3	1	3	3	1	16
E		5	8	1	3	0	0	17
計		25	25	10	10	8	4	82

第2表

学年	内容の傾向	明るい詩	静かな詩	力強い詩	思索的な詩	愛われた詩	感覚的な詩	計
I		10	7	3	3	4	0	27
Ⅱ		11	9	5	5	4	2	36
Ⅲ		4	9	2	2	0	2	19

第1表は、5種類の教科書の各学年を通じて掲載されている詩の分類である。この分類を出来るだけ客観

的にする為に、最初は16の細かな項目をあげ詩を当てはめてみた。そして、それを表のような6項目にまとめてみたのである。もちろん、詩によっては多様な傾向を持っていたり、その傾向があいまいではっきり一つの傾向にきめてしまうのが不自然な詩もあったが、著るしいと思われる項目に組み入れてある。尚、作詩指導の文章等に引用されている詩の一部分については除外することにした。これを見ると詩の掲載量は各教科書ともに大体平均しているようだが、内容の傾向面を加味して見るとA、とCに於て思索的な詩が少ないことが目につく。又、全体として明るい詩、静かな詩が6割以上を占めていることが特徴的である。

第2表はこれらの詩がいかに各学年に配当されているかを示したものである。まず、3年になると掲載詩の数が少なくなっていることであるが、これは比較的長い内容のある詩が多くなる関係である。次に、愛情のあらわれた詩と感覚的な詩の配当のところには生徒の精神的生長に対する配慮が見られる。又、静かな詩や力強い詩の数は各学年を通じてあまり変化がないが、詩の程度が高くなっているのはいうまでもない。

これらの詩は

- (イ) 生徒作
- (ロ) 大正・昭和時代詩人作
- (ハ) 外国詩人作

の作品群に大別出来る。

1年の場合は(イ)が多く、次は(ロ)のもので(ハ)は殆んど載っていない。2年になると、(ロ)のものが圧倒的に多く、(イ)、(ハ)の順で数は少なくなっている。3年は(ロ)のものが多く、次は(ハ)で(イ)は殆んど載っていない。このように身近かなところから出発して、広い世界へ眼を向けさせる内容の詩が見られるようになるのであるが作品中心的な配列であるのは言うをまたない。ここで参考までに、作品がよく載せられている作者の名をあげておこう。

(ロ)に属すもの

北原白秋	高村光太郎	宮沢賢治
千家元麿	山村暮鳥	田中冬二
草野心平	八木重吉	大木実
三好達治	丸山薫	村野四郎
笹沢美明	島崎藤村	(明治時代)

(ハ)に属するもの

ゲーテ	ホイットマン	リルケ
-----	--------	-----

ブラウニング カール・ブッセ

これらを参照して、各学年毎に鑑賞させる詩や学年に共通して鑑賞させる詩をまず選定しようということになった。

注4. 調査に使用した教科書は

二葉・三省堂・筑摩・教育出版・秀英のものである。

Ⅳ まとめとして

詩による鑑賞指導(上)は研究を輪郭づけることで終わり、以下は次の機会にゆずらなければならないので、研究を進めて行く上で留意しようと考えている点を二、三あげて締めくくりとしたい。

最初に、作品を鑑賞した結果が鑑賞者の人間性に触れる場合と、どちらかという知識を高める働きをする場合とが考えられる。いいかえると、作品が文学による人間教育の教材的な働きをする場合と、文学についての知識を高める働きをする場合とがあることになる。そういう場合を厳密に分析するのは不可能だが、鑑賞指導を行なう側ではそういう点をはっきりさせ、意識的に教材を扱う必要があるだろう。

次に、感想文の書かせ方である。生徒はとかく作文するのを嫌がる傾向があり、それが成績と関係すると考えたり、余分の負担となると考えがちである。そういう生徒の気持を考慮した上で、自主的に感想文を書かせる工夫をしなくてはなるまい。それに、書く意欲をあまり持たない生徒の処置である。その点でわれわれの研究は教室を主体としているから、生徒の自主性を尊重することの他に、作文の意欲のない生徒に半ば強制的に文を書かせる指導をすることを兼ね合わせる事が大切になってくる。

最後に、われわれが感想文を書かせる時の期待は個人差が表われることであり、生徒のありのままの姿が素直に提示されることにある。われわれはそうした感想文のねうちを素直に認めようとする姿勢を常に保つべきであると考えている。と同時に、中学生の鑑賞文は生活指導面の資料的意味も帯びているのであって、多分に経験を通した狭いものであるから、われわれとしては、深い教養と広い視野からの人間的な鑑賞が出来るように生長してゆくことを望んでいて、われわれの研究がそうした願いに添うものでありたいと考えている。